比較史という知的営みから見た地域研究

斎藤 修

地域研究と比較史にはどこか切り結ぶところがあるように思う。筆者は地域研究を専門とするわけではない、またきちんと勉強したこともない、経済史、歴史人口学というディシプリン志向の歴史家であるけれども、異文化間比較を行ってみて、「歴史」と「地域」の問題、それと密接に関連した「普遍性」と「独自性」の問題について、多少なりとも真剣に考えざるをえないことがしばしばあった。その経験から、比較史からみた地域研究リーディング・ガイドとでも呼ぶべきものを作成してみたい。

私の最初の比較史プロジェクトはプロト工業化の研究であった。プロト工業化論という、経済と人口の相互依存関係を分析の中心においた理論図式を、日本とヨーロッパの歴史のなかで実証的に検討してみて、経済の論理というのは近代以前の日欧のあいだでもそれほど変わらなかったと思われるのにたいして、人口の側ではだいぶ異なった論理が働いていたという印象をもった。[1] 経済の論理とは市場メカニズム、比較優位の原理、労働供給の法則などをいい、人口史を地域独特の現象としているのはその基底に結婚と家族形成という文化に固有の様式があるからというのが、そのポイントである。

この後者にかんして、きわめて明快な図式を提供したのがジョン・ヘイナルである。①の最初の論文

①J. Hajnal (1965) "European marriage patterns in perspective", in D. V. Glass and D. E. C. Eversley (eds.), *Population in History : Essays in Historical Demography*, London : Edward Arnold. J. Hajnal (1983) "Two kinds of pre-industrial household formation system", in R. Wall, J. Robin and P. Laslett, (eds.), *Family Forms in Historic Europe*, Cambridge : Cambridge University Press. 木下太志訳「ヨーロッパ型結婚形態の起源」、浜野潔訳「前工業化期における二つの世帯形成システム」、ともに速水融編『歴史人口学と家族史』藤原書店、2003年。
②村松祐次（1949）『中国経済の社会態制』覆刻版、東洋経済新報社、1975年。
③F. Braudel (1985) *Civilization and Capitalism : 15th-18th Century*. Volume 2 : *The Wheels of Commerce*, London : Fontana Press. 山本淳一訳『交換のはたらき』全2冊、みすず書房、1986-88年。
④T. C. Smith (1988) *Native Sources of Japanese Industrialization, 1750-1920*, Berkeley : University of California Press. 大島真理夫訳『日本社会史における伝統と創造――工業化の内在的諸要因 1750-1920年』増補版、ミネルヴァ書房、2002年。
⑤K. Pomeranz (2000) *The Great Divergence : China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton : Princeton University Press.

では、結婚年齢と生涯未婚率という尺度による観察の結果、西ヨーロッパと東ヨーロッパの結婚行動は截然と区分できること、それが出生力を通じてマクロ・レベルの人口変化パターンに影響していたことを明らかにした。その後、①の第二の論文においては類型の基準を若干変更し、北西ヨーロッパ型の世帯形成システムと結合家族型の世帯形成システムの対比という形で定式化を行った。観察される人口現象の背後にある結婚――世帯家族形成の様式にまで踏み込んだことと、それによって西ヨーロッパは北西ヨーロッパ型と限定され、逆にそれと対比される地域は、東ヨーロッパだけではなく、結合家族形態をとるほかの地域、たとえばインドや中国の社会をも視野にいれたことによって、地域を成り立たせている原理を分析できる枠組みを提供したのである。筆者から見ると、日本のような直系家族型の社会のおさまりが悪いのが気になるが、しかし、それを含んだ三類型論への拡張は、ヘイナル図式の構造を変えることなく十分に可能である。[2] ヘイナル自身は「前工業化期」と限定していて、実際、プロト工業化という本格的な工業化以前の局面をめぐる日欧比較では彼の図式が威力を発揮したのであるけれども、最近の人口現象理解、たとえば少子化問題の理解にも十分に役立つ類型学であることがしばしば指摘されている。それだけ射程距離の長い、「地域」の本質を捉えた類型学なのであろう。

●リーディング・ガイド

ところで、この段階では「経済現象、とりわけ市場に関連した現象は基本的に普遍的」というのが私の認識であった。しかし、市場経済とははたして完全に普遍的な力の産物なのであろうか。リストの②はこういう疑問を強くいだかせる本である。

村松祐次の描く戦前期中国経済のあり様は、歴史家や経済学者の通念とは著しく異なるものであった。観察される市場行動にかんするかぎり、中国人のそれは驚くほど「西」の、より正確にはアングロ・サクソンのそれと似通っていたし、市場そのものは「政府によって規制せられない、放任的自由を基調」としていた。しかし、経済社会の「態制」はアングロ・サクソンのそれとはまったく異質だったのである。市場に参加する個人の行動契機はアダム・スミスの前提とした行動様式とは異なっており、また政府の営為も私たちが近代国家に期待するものとはかけ離れていたのである。詳細は村松の著作を読んでいただきたいが、半世紀以上前に書かれたこの本の叙述は、経済にも中国という「地域」に独特の論理があったに違いないということを示唆していて、いまでも色あせない。

伝統的な経済にかんする比較地域研究にとって、③も有用な概念枠組を提供してくれる。この本は、フェルナン・ブローデルの『物質文明・経済・資本主義』三部作の一つで、伝統社会における「市場経済」を論じている。[3]

彼の考えでは、市場経済は進化の行きつく先ではなく、相当以前からかなり普遍的に存在しているものである。しかしそれは、社会の中層の話であって、全体構造のなかでは「非-経済」という一階部分と「反-市場」という最上階に挟まれていた。[4] 一階部分を支配するのは人口という数の重みと、商品以前のモノの世界であり、最上階には欲望と政治と事件の喧騒がある。いいかえれば、最上層と最下層は地域規定的、文化特殊的なのである。ブローデルの叙述は基本的にヨーロッパの歴史に依拠してはいるが、この三層構造の枠組みと、その背後にある発想法は比較史と地域研究にとってもきわめて有用な視点を提供してくれる。

このような伝統的経済観から導き出されるのは、産業革命、科学技術革命、近代化、あるいはグローバル化といった、歴史を推進させる普遍的な力が働いたからといっても、世界はひとつとなるとはかぎらないのではないかという疑問である。これは多くの地域研究者の共感を得るであろう。ただ、歴史学や経済学の研究現場で、このことを実証的かつ説得的に論ずるのは意外と容易でないものだ。その必ずしも多くはない好例として、日本史家トマス・スミスの仕事（それはアメリカにとっては地域研究であった！）をあげることができる。彼は④の序論で、三〇年余におよぶ研究歴を回顧して次のように述べている。

〔私は〕近代日本社会を、西洋の近代社会と類似しているが深部において異なったものにしている諸要因に、特別の注意を払ってきた。（中略）工業社会では共通の技術からの強制によってどの国も類似した社会になってくるという、広く受け入れられている考え方（それは、通常、他の諸社会が西洋社会のようになってくるということを意味している）に対して、私はこれを支持できないという思いを深くしてきた。[5]

彼が歴史分析の対象としたテーマは多様、またそれを分析するにあたって援用した方法論も多様であった。しかし、日本社会には、より立ち入っていえば日本の人びとの行動様式には独自の規律があったというのである。徳川時代をみると、市場経済という点では紛れもない進展があり、それはヨーロッパの経験に近似した動きであった。しかし、その動きは何かひとつのモデルに収斂することはなく、そこには、いくつかの類型軸を重ね合わせることによって初めて理解可能となるような独自性があったということを、スミスは説得的に描き出したのである。これは構造的独自性論とでも呼べるスタンスである。[6]

このようなスタンスは、したがって、応用が利く。こ

の立場から他の多くの地域についての歴史研究が積み重ねられれば、旧来の世界史パラダイムの再検討が可能となるに違いない。実際、そのような試みはすでにケン・ポメランツの⑤でなされていて、西対東、ヨーロッパ対中国という、古典的な比較軸は根本的な再吟味を迫られている。もっとも、東西比較だけが問題なのではない。「東」のなかでの比較、非ヨーロッパ世界内での比較も同じような重要性をもってしかるべきである。事実、日本の地域研究ないしは歴史学界においてもそのような動きが出始めている。大いに期待したい。

註

(1) 斎藤修『プロト工業化の時代――西欧と日本の比較史』(日本評論社、一九八五年)。

(2) この点は直系家族の二類型論という形ではあるが、以下で論じたことがある。O. Saito, "Two kinds of stem family system? Traditional Japan and Europe compared", *Continuity and Change*, vol. 13, part 1, 1998.

(3) 『物質文明・経済・資本主義 一五～一八世紀』の他の二巻は、『日常性の構造』と『世界時間』である。ともに村上光彦訳、みすず書房、前者が一九八五年、後者が一九九六～九九年刊。

(4) 『交換のはたらき』第一冊、二八四頁。経済学者ジョン・ヒックスは、近代以前の市場は、現代の市場よりも、価格伸縮的で組織されていないという点で、むしろ経済学の教科書的イメージに近いという。これはブローデルとも共通する認識といってよい。

●リーディング・ガイド

J. R. Hicks, *A Theory of Economic History*, Oxford : Oxford University Press, 1969 (新保博・渡辺文夫訳『経済史の理論』講談社学術文庫、一九九五年)。

(5) 『日本社会史における伝統と創造』一二頁。

(6) 同書所収の、斎藤修「経済史はどのような学問か――トマス・スミスの方法」、および O. Saito, "Bringing the covert structure of the past to light", *Journal of Economic History*, vol. 49, no. 4, 1989 を参照。

(7) 例えば、三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア――所有・契約・市場・公正』(東京大学出版会、二〇〇四年)。

(さいとうおさむ／一橋大学経済研究所)